

没理想論争注釈稿(七)

坂井 健

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争と言われる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鷗外への反論である「烏有先生に答ふ」(一)についての注釈。「没理想論争」については、さまざまに論じられているが、そうした論が細部の読み共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうではなく、ややもすれば机上の空論になりかねない。また、注釈についても、語釈のレベルにとどまり、視点も個別作家の文学論のみに限定されがちであった。そこで、本稿では、語句の注釈から出発

して、解釈にまで踏み込み、両者の文学論を探ることを第一の目的とする。さらに、時代を代表とする二大作家の論争を通して、当時の文壇の文学思潮を探り、論争の後の文学史に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を新たに文学史的に位置づけることを第二の目的とする。

キーワード…没理想、イデー、森鷗外、坪内逍遙、文芸批評

烏有先生に答ふ⁽¹⁾ (一)

烏有先生の駁論⁽²⁾に答ふるに先だちて、弁すべきことあり、そは先生と我れと、語の解釈を異⁽³⁾にせること、併にその本意を異にせること、

是なり。語の解釈を異にすとは、例へば、没理想の解の同じからぬが如きをいふ⁽³⁾。本意を異にすとは、先生が談理を重んずる時の本意と、我が『早稲田文学』にて談理を先にせざる時の心と、其旨のひとしからざるが如きをいふなり⁽⁴⁾。没理想の意義の、先生の解と同じからぬ由

は、ほど前号の紙上にて弁じつ。いでや、談理といふことに対するわが本意の在る所を断らん。按ずるに、先生が談理を重んずべしといふや、毎に絶対の意味にて謂ふか。即ち、古今東西の大なる談理家を、哲学者といふ際をも、それが眼中に置きて謂へるならん。是れ理といふ字を絶対の義に解したるなり。我が後にせんといふ談理は然らず。方今新聞、雑誌などに散見する、かたよりたる小議論を指せるなり。其の根底に、一系の定まれる哲理をも無うして、一時の感の浮かべる儘に、或ひは好悪に駆られて、衆他を排し、或ひは狹隘の経験を尺度として、大いなる人間を是非するが如き頑陋偏僻の小理想を謂へるなり。又思ふに、先生が眼中の文壇とわが懐ふ文壇と、其の名相通じて其の品相同じからざるに似たり。先生の談理を旨とするや、今の文壇を其のうちに俊秀ならん人々を標準として観察するか。我れは然らず。初学後進のなほおさなきを標準として説を立てたり。『早稲田文学』の講述を、読まん人々の目的としたり。こもまた先生とわれとの解の相異なる一点にやあらん。

注

- (1) 烏有先生に答ふ・『早稲田文学』九号（明治三十五年二月十五日）、一〇号（二月二十九日）の「時文評論」欄に掲載。（二）、（三）は九号、（三）は一〇号）のち『文学その折々』所収。九号「時文評論」欄の「烏有先生に答ふ」の直後に、「小羊子が白日夢」、「小羊子の愚痴」が掲載されている。なお、初出では、ほとんど句読点がないほか、表記に若干の違いがあるが、本稿では必要のない限り示さない。ただし、語句の異同については示す。

(2) 烏有先生の駁論・『しがらみ草紙』二七号（明治三十四年一月）の「早稲田文学の没理想」における鵬外の批判を指す。

(3) 語の解釈を異にすとは、例へば、没理想の解の同じからぬが如き意味ではないと断つた上で、「造化」（宇宙）について使う場合は「方便」であり、「詩文」（文学作品）について使う場合は「目的」（結果として達成されるべき目的）であるとして、さらに二つに細分している。すなわち、「造化」については、「造化」自体の「理想」（イデー、宇宙の趨勢を支配する精神）は、無限であり、有限の理智によつては不可知なので、これに達するには、「没理想」（有限の自己の考えに執着しないこと）という「方便」が必要だというものであり、「詩文」については、作者の考えが現れていないような作品のありさまを指すべき「目的」とすべきだというものである。いずれも「没理想」とは無理想であるうと決めつける鵬外の解釈と意味を異にしているだろう。詳しくは、「烏有先生に謝す」（『早稲田文学』七号、「没理想の語義を弁ず」（『早稲田文学』八号）を参照のこと。

(4) 本意を異にすとは、先生が談理を重んずる時の本意と、我が『早稲田文学』にて談理を先にせざる時の心と、其の旨のひとしからざるが如きをいふなり。・「没理想」の語の解釈については、前に述べたから、ここでは、その「本意」（目的とする対象。前注の「目的」とは別。）について、論ずるとの先触れ。具体的には、次に述べられるように、鵬外は、文壇の俊秀を相手にすることを目的とするようだが、逍遙自身は『早稲田文学』を読むような初心者を相手にすることを目的にするとの相違がある、ということを示す。

(5) 断らん・明白にしよの意。なお、初出ではこの直後で形式段落が切れている。

(6) 是れ理といふ字を絶対の義に解したるなり。・日本近代文学大系『坪内逍遙集』（角川書店、昭和四九年）の注釈（中村完による）は、「理」というものをそれ自体で成立する絶対のものと解したのである。」とす

るが、ここでは、次にあげられる「小議論」のように、限定されるある種の「理」ではなく、ありとあらゆる議論・理屈についてというのが、の意にとりた。

(7) 方今新聞、雑誌などに散見する、かたよりたる小議論を指せるなり。其の根底に、一系の定まれる哲理をも無うして、一時の感の浮かべる儘に、或は好悪に駆られて、衆人を排し、或は狹隘の経験を尺度として、大なる人間を是非するが如き頑陋偏僻の小理想を謂へるなり。

ここで逍遙に檜玉に上げられているのは、直接には、鵬外以外の評論家を指すと考へるべきである。しかしながら、「我れにあらざして汝にあり」での逍遙の非難は、鵬外自身ではなく、斎藤緑雨と石橋思案に向けられたものであることを承知であつたはずなのに（坂井健「没理想論争の発端—斎藤緑雨と石橋思案の応酬をめぐって—」『解釈』平成七年四月号、参照）、鵬外があえて、逍遙に対する論難にふみきつたのは、逍遙の批判が実質的に鵬外自身の批評活動にも及ぶ性質のものだと判断したためと考へることもできる。なお、文中「かたよりたる小議論を」は、初出では、「かたよりたる小議論をば」。

(8) 『早稲田文学』の講述を、読まん人々の、目的としたり。初出「『早稲田文学』の講述を、読まん人々を」。自分は『早稲田文学』の講述を読むような、初心者に対して心構えを説いているに過ぎない。(3) 参照。

なお、『早稲田文学』には、「校外生募集」募集と題して「本校は明治二十年以来政治、司法、行政諸科の講義録を発売し校外有志者を授業し来りしが」云々の広告がよく見られる（例えば、一一号、明治二五年三月十五日）こと、また、『早稲田文学』の内容は、釈義・講義・評註・雑録・時文評論の五項に分かれているが、釈義・講義・評註の内容は、やはり、時折掲げられる「文学科課程表」（同じく、一一号参照）の科目に相当することから、『早稲田文学』は、いわば、通信教育生を対象とする講義録的な性格を持っていたものと推察される。したがって、こうした講述を読む初心者を念頭において講義をしていることに對して、別の観点から批判されても困るというのである。蓋し、もつ

ともな反論であろう。

わが謂ふ小理想家は、未だ全く河東の地を踏まずして、白頭の豕を異なりとし、未だ全くニウカツルの坑を見ずして、石炭の多きに誇るが如き識見の極めて狭きものを謂ふなり。或ひは筆に儒、仏を祖述し、或ひは口に東西の哲理を談じ、一見博聞なる如くなれども、其の實、いまだ一たびも此れ彼れを斟酌して是非を比べ見たることも無く、漫に一道の皮相を奉じて、初めより方寸の世界に安んじ、些も我以外を見ざるものをいふなり。更に例を挙げていはゞ、我が師の教をのみ無双の靈玉と驕信して、当初より他山の石を求めず、一学派、一流派の偏屈なる小宇宙に彷徨徜徉し、殆ど literally に、我れ以外の世界を見ざるものをいふなり。譬へば、熱帯に棲める民の、寒帯、温帯を知らざるが如く、肉食の民の未だ會て肉の旨きを知らざるが如し。さもあらばあれ、彼等固より理を會得すべき能力を有てり。能く弁ずる人ありて、懇ろに温帯の利益を講じ、若しくは肉食の功德を説かば、彼等或ひは會得せんか。只彼等をして其の説を聴聞せしむべき機会無からんを如何にせん。彼等は、はじめより寒帯温帯をもて、魔界、地獄なりと断言して、そが片影をだに窺ひ見ることを屑とせざるなり。又は肉食の主義を邪宗、異端と思惟して、そも肉とは何の肉か、如何にして食ふものか、その有様の大むねをだに知らざれば、そが利害得失の如きは、はじめより聞かんと欲せざるなり。夫れ談理の功德は広大無辺なるべしといへども、縁無きものは度しがたき習ひなり。聴く者の心中に、多少迎ふる所なからんには、菩薩が大慈悲の妙音も、牛に

対ひての弾琴にひとしかるべし。亜典⁽⁷⁾の民心已に腐りては、デモスゼニースが雄弁も、パトリック・ヘンリーが慷慨の声に如かず、宗教改革の傾向⁽⁸⁾独逸の国内に漲らざりしならばルーテル上人が勇猛の獅子吼も遂に狂瀾を廻し得ざりしならん。蓋し傾向⁽⁹⁾は理に基くといはんよりは、情に由来すといふべく、他力に頼るものといはんよりは、自力に由るものといふべきか。即ちその人が無意識の中に心の方針を転じつゝあるをいふか。されば、一旦夕の談理をもて傾向を醸さんこと、いとくかたし。

注

- (1) 河東の地を踏まずして、白頭の豕を異なりとし・あたり前のことを、珍しいことのようにいうこと。以下、語釈については、中村氏の注釈にあるので、ごく簡単に記すにとどめる。
- (2) ニウカツスルの坑・ニューカツスル炭坑。イギリスの代表的炭坑。
- (3) 或ひは輩に儒、仏を祖述し、或ひは口に東西の哲理を談じ、一見博聞なる如くなれども、其の實、いまだ一たびも此れ彼れを斟酌して是非を比べ見たることも無く、漫に一道の皮相を奉じて、初めより方寸の世界に安んじ、些も我以外を見ざるものをいふなり。直後の「我が師の教をのみ無双の靈玉と輕信して：我れ以外の世界を見ざるものをいふなり」と同様で、さまざまな思想を比べた上で、自分自身の確信した思想に依拠するのではなく、たまたま自分の知りえた借り物の思想を絶対のように盲信して評論を行なう評家を批判したもの。鵬外自身、例えば「答忍月論幽玄書」〔『柵草紙』一四号、明治二三年一月〕などで、盛んにハルトマンを引いて立論しているので、こうした批判は、鵬外にも当てはまらないことはない。（前段、注(7)参照。）なお、「二葉亭の「落葉のはきよせ 二籠め」の中には、「客冷裏に問ふて曰く嗜好に標準有りや 答へて曰く道ひ難し、古人の好む所必ずし

も今人の好む所にあらず、白人の惡む所ろまた必ずしも黄人の惡む所にあらず 古人よきや今人あしきや白人よきや黄人あしきや是れ殆んど知る可らず」、「アブソリュートツルースは吾人の得て知る所にあらずれどもリレーウツルースは必ずしも知り得べからざるあらず、即ち嗜好に標準あるべけれどそれは相對標準にして絶対標準にあらず」（『嗜好論』）などあり、唯一絶対の「標準」は存在しないとの考えが見える。そうした見方に立つ限り、一つの考え方に固執して批評をすることは、当然おかしいということになる。ここに二葉亭と逍遙の考えの符合を見ることができよう。なお、ここでの二葉亭の論と逍遙の論と対応については、坂井健「二葉亭四迷『真理』の変容 仏教への傾倒」〔『新潟大学国語国文学会誌』三二号、平成元年三月〕ですでに指摘した。

(4) literally・文字通りに。

(5) 彼等恐らくは会得せんか。初出「彼等恐らくは会得せんか」どちらでも意味は通じる。初出「が」は、逆説の接続の意、本文「か」は、疑問もしくは反語の意で、話を聞く機会がないのだからどうしようもない、という続き。前の「説かば」が仮定条件であることを考えると、その条件が満たされたならば、理解するだろうが、のようにつけたほうが続きとしてはよいが、この頃の逍遙の文の癖からみると、ここで逆説の「が」が用いられるのはおかしいともいえる。私見としては「か」を取りたい。

(6) 寒帯温帯をもて、魔界、地獄なりと断言して・初出「寒帯温帯をもて魔界地獄なりと断言して」。どちらでも通ずるが、初出は単純な誤植であろう。

(7) 亜典・アテネ。

(8) デモスゼニースが雄弁も、パトリック・ヘンリーが慷慨の声に如かず・智に訴える論理よりも、感情に訴える方が、有効であることを述べたもの。デモスゼニースはアテネの雄弁家。パトリック・ヘンリーは米國獨立革命の指導者。中村氏注釈参照。

(9) 宗教改革の傾向独逸の国内に漲らざりしならばルーテル上人が勇猛の獅子吼も遂に狂瀾を廻し得ざりしならん。「傾向」(理屈を受け入れるための下地・雰囲気。後に「傾向(初発心)」とある。)がない限りは、理を説いても無駄であろうということ。「ルーテル上人」は、宗教改革の立て役者マルチン・ルター。「獅子吼」は真理を説くこと。

(10) 蓋し・初出「案するに」。おそらく、冒頭のほうに「按ずるに」とあるので、重複を避けたものと思われる。

(11) 傾向は理に基くといはんよりは、情に由来すといふべく、議論を受け入れるかどうかは「傾向」にかかっている。その「傾向」は、「情」に基づく。だから、議論によっては、「傾向」を作ることとはできないので、地道に「傾向」を醸すべく、自分は「記実」に従うのだ、との立場の表明。なお、二葉亭の「落葉のはきよせ 三籠め」に「凡そ議論は理より生ずるものにあらずして a disposition of mind より生ずるもの也」(「涅槃」)とある。

我が所謂今の文壇の小理想家は、其の見る所の狹隘にして、偏信偏執の甚だしきこと、頗る前例にいへる所と相似たり。その見る所のいと狭きは、齡の尚ほ若うして世故経見に富まざるが為にして、その偏信偏執なるは、わが師(書籍の形したる、または人の形したる)が教へつる所をのみ天上天下、唯一の真理なりと軽信し、それを無等々咒と奉じたてゝ、総て他の言ふ所は、仏、菩薩の説法と雖も、これを外道の声となし、悪魔の姿となし、初めより聞かず、又観ざるが故なり。彼等は猶ほ恍惚たる少公子ロミオのごとし、ロザライン姫の外に、美人あることを信ぜざるのみか、たとひ人來りて、有りて教ふるとも、そを垣間見んともせざるなり。さりながら彼等の本心を探るに、強ちに他の美人を見まじ、聞くまじと誓へりとしも見えず。否、彼等がロ

ザラインを慕へるは、未だ真の恋にあらず、神聖なる靈火の作用にあらず、寧ろ他の衆美人を見ざるが故のみ。而してその見ざるは見るべき伝手の無き故なり。何となれば、彼等が周囲なる幾百の張氏、李氏は、いづれも皆ロミオの化身にして、甲のロミオの怪は以為らく、小うちぎ彼て緋の袴はきたる上臆こそ、是わが極美のロザラインなれ、天が下にあが仏にまさる美人無しと。乙のロミオは以為らく、金翡翠の寶髻、繡駕籠の羅裙、髪を見ては蟬翼を想ひ、黛を見ては遠山を想ふ、わがこのロザラインにまさる国色無しと。丙、丁、戊、癸おの／＼そが好める所に僻して、姿態服装の差別を固執し、審美賞玩の眼は絶えて無く、徒らに外見を見て相誹詆し、互ひにわが愛するのみ無双の麗質と誇りたつたへ、他のロザラインを貶すること、醜悪なる妖婆を見るが如し。此に於てや、一には此の競争の余りに眼くらみ、一には服装の差別に拘らひて、他を見ること蛇蝎の如く、遂に無心の境に立ちて他の衆美人を見ることを難んず。滔々たる文界の小理想家比々として皆是なり。是れ些も相見ざるにひとしからずや。かくてその甚しきは師父の説く所をまこととして未だ一たびも見ざるうちより他は悉く蛇蝎と信じて、かりそめにもこれを顧みざるなり。諸学派の末流は概ね是なり。夫の極端なる保守主義と極端なる改進黨とが互ひに柄鑿相容れずして、日に月に、遠ざかりゆくを一例とすべし。それも、一流、一派の頭だつ人の上は、よしとせん。その師の説に感濁して、いよ濁流におもむかん人その身の行末のいと慨し。さてこれらの人は、いづれも、我れ以外の世界を見んとする心無きものと信ぜざる可からず、我れ以外に閑したる理論は、よきもあしきも、絶えて聞くこ

とを好ざるものと信ぜざる可からず。即ち、些も傾向無きものともいひつべし。果たして然りとせば、彼等をして彼等以外の世界に關したる理を聞かしむべき方便は如何⁽¹⁶⁾。

注

- (1) 世故経見・人生経験。
 (2) わが師（書籍の形したる、または人の形したる）・ここに「書籍の形したる」とあるところに、逍遙の鵬外に対するひそやかな皮肉を読めないこともない。
 (3) 無等々咒・「般若波蜜多羅蜜咒」の一。
 (4) 彼等は猶ほ恍惚たる、少公子、ロミオのごとし、ロザライン姫の外に、美人あることを信ぜざるのみか、たとひ人來りて、有りて教ふるとも、そを垣間見んともせざるなり。・「ロミオとジュリエット」のロミオは、キャピュレットの夜会でジュリエットに出会うまでは、ロザリンを最高の美人と信じ、ロザリンよりずっと美しい娘がいるという友人ベンウオーリオの言葉を否定していた。なお、初出の表記は「ロメオ」、「ロザリン」。
 (5) 何となれば・初出「さるは」。どちらでも通ずる。本文のほうが意味が強い。
 (6) 幾百の張氏、李氏は・張氏・李氏ともに、よくある姓のたとえ。「之を譬ふるに、張三も人なり、李四も人なり」（二葉亭四迷『小説総論』）
 (7) ロミオの化身・初出「化生」。
 (8) 小うちぎ・打着と単の上に重ねてきた礼服。
 (9) 金翡翠の寶髻、繡鴛鴦の羅裙・金や翡翠でかざった髪、鴛鴦の刺繍を下した薄ぎぬの裾。
 (10) わが愛るをのみ・初出「わが愛るロザリンをのみ」。
 (11) 妖婆・初出「ウキツテ」。「ウキツテ」は witch
 (12) 遂に無心の境に立ちて他の衆美人を見ることを難んず・逆にいうな

らば、無心の境に立って、他の立場を見ることができると目指したのが、逍遙の主張した「没理想」であることになる。

(13) 是些も相見ざるにひとしからずや。・初出「是豈些も相見ざるにひとしからずや」。「豈」が入ったのでは文としておかしい。本文のほうが良い。

(14) 衲疊・ほぞとさく。

(15) いやよ濁流におもむかん人その身の行末・初出「いやよ濁流におもむかん人の身の行末」。初出では「いやよ」以下は、「行末」にのみかかるのに対し、本文では、「いやよ濁流におもむかん人」が示され、その「行末」が嘆かわしいということになる。「濁流におもむかん人」が強調されるので、本文のほうが良い。

(16) 彼等をして彼等以外の世界に關したる理を聞かしむべき方便は如何。・「理」を聞かせるためには、「傾向」作らねばならず、「傾向」を作るためには「記実」が必要である、ということになる。前段、注(11)参照。

われは思へらく、先づ傾向を作らざる可からずと。悉くいへば、彼等をして先づ遍く彼等以外の世界に目を注がしめて、無意識の間に、美の宇宙に充滿せることを覺らしめざる可からず。再び前の比喩を用ひていはんに、天が下の国色を一室に集めて、其の髪飾りをも、服装をも、ほとほと同じさまにもてなさせ、さて幾百人のロミオをして一瞥の下にそを見せしむるに優りたる良策無し⁽¹⁾。若し彼等、苟も真美を知るべき本能あらば、積年の迷霧此の時に霽れて、爰にはじめてロザラインの外に、天のなせる麗質ジュリエットあることを悟らんか。仮令しか悟ること能はざるも、少くとも天下に恵心蘭質の乏しからざることを覺るべし。げにや、わが仏のみ尊しと思ひこめる心には田鶴

の群ぐんにあるわが矮鶏ちやうけいを鶴、鳳にも優ると見るらめど、さまざまにかたよれるは、如何にともし難し。われほめの目には、痘痕あざあとを笑凹わらぼちと見るが習ひならば、隣人の味噌みそをうましと見るも、人情の習ひならん。われは信ずらく、衆美を一堂に集むることは、多少偏信の癖を和げて、少くとも美といふものゝ、世界に遍きことを覚らしむるに足らんと。是れ豈に審美の論説を聞くべき初発心(傾向)を作るにひとしからずや。

注

(1) 天が下の国色を一堂に集めて、其の髪かみの飾りをも、服装ふくそうをも、ほとほと同じさまにもてなさせ、さて幾百人のロミオをして一瞥の下にそを見せしむるに優りたる良策無し。・「色」は美人。前に「小うちぎ被て緋の袴はきたる上臈こそ、是れわが極美のロザラインなれ」「金翡翠の寶髻、繡鴛鴦の羅裾」とあるのを受ける。そうした飾りの違いを除き、全く同じ服装にして、一堂に集め、比較させるのが良いということ。具体的には、さまざまな文学作品について、先入観の入った批評をせずに、そのまま虚心に記述して、『早稲田文学』の文芸欄に集め、人々に判断させるのが良い、ということをいう。なお、「そを見せしむる」は、初出「こを見せしむる」。

(2) 爰にはじめてロザラインの外に、天のなせる麗質ジュリエットあることを悟らんか。・自分の思い込みで、それだけが良いと決めてかかっていた作品以外に、もっとすぐれた作品があることを覚るのではなにか、の意。

(3) 田鶴の群にあるわが矮鶏を鶴、鳳にも優ると見るらめど・初出「田鶴の群なるわが矮鶏をも鶴にもまさと見るらんなれど」。

(4) さまざまにかたよれるは、如何にともし難し。・それほどまでに片寄っているのは、どうしようもないけれども、と逆接の気持ちで読むと、

次の「われほめの目には、痘痕を笑凹と見るが習ひならば、隣人の味噌をうましと見るも、人情の習ひならん。」との文脈を考える際に、多少の先入観が入るのは人情の常で誰しもあることだ、とのつながりになって続きが良い。

(5) 是れ豈に審美の論説を聞くべき初発心(傾向)を作るにひとしからずや。・「衆美を一堂に集むることは、多少偏信の癖を和げて、少くとも美といふものゝ、世界に遍きことを覚らしむるに足らんと。」ということであるから、それまで、先入観にとらわれて、自分の意見に固執していた者も、他人の意見に耳を傾けようとするようになる。したがって、「審美の論説を聞くべき」下地ができあがるというもの。

更に比喻を離れて明白にはんに、明治文壇は衆小理想(衆我)の戦場なり、衆小理想の戦ひは大理想を作るべき楷梯なれば、われ固よりこれを可とす。恐らくは人間の文明史は、衆我が競争の記録たるに過ぎざるべし。われ豈に衆我を排せんと企つるものならんや。しかはあれど、小理想と名づくるが中にも差等あり、全く他の理想の本体を見ずして、これを貶斥し、絶えて他の我を顧みずして、独りわが我のみ固執するものあり。彼等は文字の通り(literally)に他を見ざる者なり。かゝる小理想は理想を闘はすることはせずして、をさく憎悪を闘はす。即ち、要無きに相衝突し、相蹂躪して、他を害ひ、自家を妨げ、前むにもあらず、退くにもあらず、中間にさまよへり。彼等は文壇の雑艸なり、詞林の荆棘なり。猛火を放つてこれを焼かんか、其の理想の美をも、併せて灰燼とするに忍びざるなり。蓋し厭ふべきは彼らの偏見と偏執とのみ。その理想とする所のものは皆文学の微分子なり。これを滅さんと欲するものは狂ならざれば愚なり。此に於て

や、我れは明治の文壇に在りと在る百般の理想（我）⁽⁶⁾を網羅し来りて、及ぶべきだけ、其の差別相の目易からぬものを除き、及ぶべきだけ、其の平等の美の在る所を表現し、はた及ぶべきだけ、記者みづからの我を没して、わが所謂没理想の見によりて、衆我の実況を記述し、宛然一種の文学的博物場を開設し、幾百の流派をして互ひに相見るべき端語を得しめんと欲す。然り、先づ相見えしめんと願へるのみ。未だ相和せしめんと望むに違あらず。若し夫れ衆我をして一和せしめんと望まば、我れに衆我を容れて余ある宇宙大の理想無かるべからず。我れ豈に夢にだにかゝる大任に当ることを得べしと思はんや。我れは只彼等をして相見えしめんと願へるのみ。真美の説法を聞かんとする初発心（傾向）を作らんと願へるのみ。我れ竊に思へらく、公平なる記実は我心に愛憎好悪無からんか、これを行ふこと難きにあらず。我れ不敏なりと雖も、此の公平の心無からんや。併しながら、他の談理の甚深はこ是れわがともがらの事にあらずと。わが事実の報道を先にし、て必ずしも談理を旨とせずと⁽¹³⁾いひし所以は即ち是なり。

注

(1) 明治文壇は衆小理想（衆我）の戦場なり。「衆小理想」は、おおくの片寄った意見。明治文壇でなされている批判は、さまざまな片寄った意見の争いに過ぎない、ということ。

(2) 衆小理想の戦ひは大理想を作るべき階梯なれば、われ固よりこれを可とす。次の「恐らくは人間の文明史は、衆我が競争の記録たるに過ぎざるべし。」に示されるように、逍遙の文化史に対する認識は、さまざまな議論の対立によって展開してきたものというものであって、

その考えは、決して、議論そのものを排撃しようとするものではなかった。

(3) かゝる小理想は理想を闘はすることはせずして、をさく／＼憎悪を闘はず。当時の文壇の批評に対する逍遙の考えが如実に現れている。それは議論にすらなっておらず、たんなる感情的なけなししい過ぎぬとの逍遙の認識。なお、初出は「闘はずことはせず」。本文は、サ変に活用させたもの。

(4) 猛火を放つてこれを焼かんか、其の理想の美をも、併せて灰燼とするに忍びざるなり。逍遙の比喩にのっとって理解すると「其」の指示内容は、「文園」・「詩林」になるが、次の「その理想とする所のものは皆文学の微分子なり」との整合性を考えると、「其」は批評を指すと考えた方が良好だろう。たとえ片寄った批評でも、その中には見るべき点もあるであろう。それなのに、その批評自体を全否定してしまふと、そうした美点までも葬り去ってしまうことになる。だから、「忍びざるなり」ということになる。

(5) その理想とする所のものは皆文学の微分子なり。批評に現れている意見は、個人的見解に過ぎないけれども、それも文学を構成している一つの要素には違いないわけである。したがって、「これを滅さんと欲するものは狂ならざれば愚なり。」ということになる。「微分子」は、小さな分子。当時の新知識である。文学が小さな個人の意見から成り立っていることを、物質が細かな分子から成り立っていることの比喩で言ったもの。文学史的な立場から見た場合、ほとんど忘れ去られた批評家の意見でも、大きな意味を持つことがあるわけで、「小理想」も無視すべきではないとした逍遙の、文学史家としての目の確かさを感ぜさせよう。

(6) 百般の理想（我）。さまざまな意見。意見はあくまで個人のものであり、個人の考え方が現れたものであるから、「我」ということにもなる。

(7) 其の差別相の目易からぬもの・あまりにも偏見がひどくて、見苦し

いもの。

(8) 記者みづからの我を没して・自分自身の先入観や偏見を捨てて。逍遙の、批評態度としての没理想¹」を端的に言い表した言葉である。

(9) 衆我の实况を記述し、宛然一種の文学的博物場を開設し、幾百の流派をして互ひに相見るべき端緒を得しめんと欲す。・さまざまな批評家たちの意見や文学活動のありさまを紹介し、その時々々の文学の实况について一読で分かるようにし、それによって自分のものの見方以外にも、さまざまな考えがあることを覚らせて、相互の理解のきっかけにしよう・『早稲田文学』の「時文評論」は、いわゆる時事文芸の評論欄であるが、文芸評論だけではなく、結社、雑誌、新刊書など、文界のさまざまな動きの紹介にも力を入れており、当時の文壇の動きを知るには欠かせない資料である。逍遙の意図は、現在もなお生きているといえる。

(10) 願へるのみ・初出「願へるなり」。

(11) 若し夫れ衆我をして一和せしめんと望まば、我れに衆我を容れて余ある宇宙大の理想無かるべからず。・それぞれ対立しているさまざまの意見を一つにまとめようとするならば、あらゆる意見を説得し、包括することができるような普遍的な思想に到達していなければならぬ。したがって、「宇宙大の理想無かるべからず」ということになる。

(12) 他の談理の甚深は是れわがともの事にあらず・「我れにあらずして汝にあり」(『早稲田文学』三号)に「博識卓見の学者は、世間の人いと多かり、仏人、独人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現実の報道を旨とし、偏にアングロサクソンの常見を師とすべし」とある。自分たちは、難しい議論はせずに、「記実」に従事するということ。「甚深は」は、初出では「甚深、」。本文は、「は」を補って分かりやすくしたものの。

(13) 事実の報道を先にして必ずしも談理を旨とせず・初出は、「事実の報道を先にして必ずしも談理を旨とせず」と二十鍵括弧でくくられてゐる。「我れにあらずして汝にあり」に「此の『早稲田文学』の巻末に、

「時文評論」の欄を設け、これら方寸の宇宙に棲息して、毫も其の外を知らざる人に、せめても方百里の現実を見せて偏見の弊を少うせんと企図す。吾人が事実の報道を先きとして、必ずしも評論を旨とせざるは、是れが為なり」とある。

然り、我れは記実を先にしたり、『早稲田文学』の「時文評論」欄内に於ては談理を後にすべしと明言したりき。さばれ、未だ會て談理を斥くべしといひしことは無し。第三号の「時文評論」の剪頭²に曰はく「博識卓見の学者は世間に其の人いと多かり、仏人、独人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現実の報道を旨とし、偏にアングロ・サクソンの常見を師とすべし³」と。是れ豈にわが談理を斥けざる明證にあらずや。我れ若し談理を非とせば、何条わが畏敬する同胞⁴に向ひて、我が非なりとする務を委ねん。博識卓見といひしは明に推称の詞なるをや。

注

(1) 『早稲田文学』の「時文評論」欄内・『早稲田文学』四号(明治二四年一月)の「時文評論」欄を指す。なお、初出には、「時文評論」に鍵括弧はない。

(2) 第三号の時文評論の剪頭・中村氏は「逍遙は「剪頭」といっているが、この一段は論の末尾である」とするが、これは「時文評論」の冒頭に掲げられたことをいっただけのものである。

(3) 「博識卓見の学者は世間にいと多かり、仏人、独人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現実の報道を旨とし、偏にアングロサクソンの常見を師とすべし」・初出は二重括弧。前段の注(12)参照。

(4) わが畏敬する同胞・仏人・独人を指す。

これを要するに、談理、記実に関して、先生と我れとその見解を異にしたるが如きは、語の解釈の同じからぬと本意の相異なるによるにあらぬか。^①先生が示教を俟つ。

注

(1) 語の解釈の同じからぬと本意の相異なるによるにあらぬか。・鷗外の論難は誤解に基づいたもので、二人の考えに本質的な相違点はないのだ、との意見の表明。

(付記) 本稿は、『逍遙選集』を底本とし、必要に応じて初出を参照した。注釈にあたっての段落の区切りは、『逍遙選集』の形式段落にしたがっている。

さかいたけし 国文学科
(一九九五年十月二五日受理)